



旧音別町の地域課題と音別ふき落団

(一社) 釧路社会的企業創造協議会

櫛部 武俊

生活困窮者個別支援⇒連携(つなぐプロ・行政)⇒住民生活(ナチュラル資源)にたどりつく

◆人口減 2005年平成の大合併
人口2,756人⇒2019年1,909人に減少

◆中心から周辺になる。議員ゼロ

◆基幹産業・酪農・林業など
2つになる特産自生蕎麦が枯渇

◆営農を辞める酪農家
生活困窮と孤立

◆蕎麦への思い・音別住民の自尊心
つなぐプロ発見と住民生活の普遍性
(困窮支援・雇用・総合事業通所サービス
・観光・農福連携・地方創生・介護)

◆互酬(ストロング)+よそ者(ウィーク) ⇒共感の醸成に一役





1

踏をたべる頻度、
時期を教えてください

3日に1回	
週に1回	
月に1回	
3か月に1回	
半年に1回	
年に1回	



参考みはら・かがやき食堂

月1回3時間営業 釧路の「かがやき」

地域食堂ですが

人気は名店級

【釧路】釧路市内の地区会館で毎月1回、3時間だけ営業する地域食堂が、毎回100食以上の定食が売り切れるほどの人気となっている。全国の特産品を使った定食が中学生以上300円、小学生以下100円で味わえるほか、同時に開かれる一輪車教室や大学生らによる学習応援コーナーが好評。幼児からお年寄りまでが楽しむ交流の場に育っている。

(釧路報道部 佐竹直子)

毎月第2土曜の午前11時に迎えられ、うれしい「アかがやき」にある会

議室が、60席の「みはら・かがやき食堂」に変わる。

ランチを囲んで住民が交流する場をつくること、昨年5月に始まった。

今月8日は、ボランティアの中学生12人が接客を担当し、「いらっしやいませ」の元気な声で客を迎え入れた。開店からまもなく、席はお年寄りや子どもたちで埋まった。

定食は、根室産アサリを使ったパスタとクラムチャウダーに、果物のデザートがついた。笑顔で食べていた独り暮らしの野村敏子さん(78)は「孫みたいなた

材料費はスーパーの特売でまとめ買いしたり、業者に値引きを直接頼んだりして毎回3万5千〜4万円に抑え、食事の料金と会館の指定管理者である警備会社

毎回100食以上完売 ■ 高齢者も子供も



高齢者や親子連れでにぎわう「みはら・かがやき食堂」。高校生(中央)がサービスのコーヒーを笑顔で配る

地域食堂 安価な食事を提供しながら、住民の居場所や交流の場所をつくる非営利の住民活動。コミュニティ・レストランとも呼ばれる。食堂によっては子育て支援や、障害者、若者の就労体験の場などとしても活用されている。

の支援で運営費を賄う。道内の地域食堂は、コミュニティ・レストランネットワーク北海道(後志管内余市町)が把握するだけで約30カ所ある。同団体は「20〜50食を出す食堂が多い中、200食近く提供するかがやき食堂はすごい」と

100円玉を手に、1人で食堂に来る子どもも少なくないという。松田さんは「世代を超えて一緒に楽しく食を築く場になりたい」と願う。

が指導する子どもたちのための学習コーナーも開かれ、毎回十数人が参加している。

隣室では、釧路公立大生らが指導する子どもたちのための学習コーナーも開かれ、毎回十数人が参加している。

運営日には、会館併設の体育館で一輪車教室も開く。小中学生10人が交代で講師となり、バランス感覚と体幹を鍛える方法を幼児や小学生に伝える。食堂の隣室では、釧路公立大生らが指導する子どもたちのための学習コーナーも開かれ、毎回十数人が参加している。